



十津川村産材による欧州基準の 超省エネ住宅「パッシブハウス」～十津川村～

十津川村は、村内産木材を使った、世界一厳しい省エネルギー基準と言われる「パッシブハウス」基準のモデルハウスを、「イオンモール橿原アルル」（橿原市）の「十津川の森」内に建築している。

現在、十津川村と、同村の森林組合、木材協同組合は、地元奈良県の木材加工事業者やビルダー、工務店を会員として「十津川郷土の家ネットワーク」を構築。政府が推進する省エネ・長寿命の「長期優良住宅」の推進と、高付加価値の同村産木材のブランド化を進め、林業の六次産業化を目指している。

そのため、3月末完成予定のこのモデルハウスは、十津川型省エネ住宅の提案、同村産付加価値木材製品の流通促進に向けた同村のコンセプトをアピールするもので、今後、省エネ性能、耐久性を備えた長期優良住宅に関心を持ってもらうための情報発信拠点としていく予定である。

■世界一厳しいドイツ基準のパッシブハウスとは

パッシブハウス（Passive house）とは、高断熱・高气密で住宅のエネルギー効率を高め、必要なエネルギーを自然エネルギーで賄おうという、文字通り受け身（Passive）の住宅で、その性能基準を満たすためには、窓や断熱材、換気装置の選別、気密・断熱の施工技術力、熱損失や消費エネルギーの計算など高レベルな建築設計と施工が求められる。

住宅エコポイント制度を機に、次世代省エネルギー基準を満たした住宅が急増しているが、一方で、諸外国に比べて基準のレベルが低いとの指摘も多く、ドイツの「パッシブハウス」が注目され始めた。

そこで、「十津川郷土の家ネットワーク」全体の世話役である「NPO 法人木造住宅品質確保普及促進協議会」（橿原市）理事長の黒川恵史氏がこれを十津川村に紹介し、設計監理はパッシブハウスジャパンの森みわ氏が手掛けた。

また、断熱効果の高い三重構造の木製サッシの生産にも取り組んでおり、同村産杉材をドイツの木製サッシメーカーに送り委託加工し、同ハウス



「十津川の森」で建築中のパッシブハウス

でもこの三重サッシが使用され、将来的には、村内で地元産木材を使用した高性能木製サッシを製造することも視野に入れている。

■長期優良住宅の普及と村産材のブランド化

平成21年6月、「長期優良住宅の普及の促進に関する法律」が施行され、政府は、省エネ・長寿命の環境負荷の小さい住宅づくりを打ち出した。また、全国各地で産直住宅のモデル展開が進み、地域産材利用住宅、省エネ性能の高い環境配慮型住宅などの建築が業界でも活発化してきている。

その中、「十津川郷土の家ネットワーク」でも、長期優良住宅の普及を目指している。十津川村で出材された原木を地元製材施設で半製品として出荷し、その後、高田木材協同組合で人工乾燥等を行うことにより品質が安定的で高い強度とした上で、「奈良県地域認証材」の認証を受けて地域ビルダー等に供給。そして、産直住宅「十津川郷土の家」が建設される。

産直住宅においては、どちらかというと十津川村は遅れての参入であり、他産地と同じことをしているのは価格競争に埋没する可能性もある。

そのため、高付加価値化と品質保証により省エネ性能の向上を図り、原木出材から製材・加工、建築までの販売ルートを確認することでブランド化を図っており、平成23年には、「十津川郷土の家」は40棟を超える建築実績に至った。

（山城 満）